ふことになるのだらう。よしんばそ 登山は大陸進出とか國威發揚とかい

た勇ましい名目はたゝないにして

する所ありとすれば、

海外への遠征

の中での山登りが體位向上に香

いふべきであらう。

とに日本の登山者は惠まれてゐると

そこで山登りは銃後國民の體位向上

背嚢に黴を生やしてもつまらない、

近はどこの山も倍舊の繁昌振りだ。 に適すといふ旨い理屈がついて、

國内で戰鬪行為の行はれる懸念は

山は手近にあるし、

まと

時のことか見込が立たす、

登山靴や

建設で非常時が平常時に戻るのは何 らか山も靜かだつたと聞くが、

長期



本 會 岳 山 H 89

吾等が祖國日本の登山界はと言へ 事變勃發の一昨年の夏は、

殆んど疑ふの餘地がなからう。

く送り出された事實などからみて

+ 月 十 年 四 和昭

海外遠征の實現性

島

敏

男

ヴェレスト遠征が休戦の四年後に漸 影稀であつた話や、英國の第一囘エ 當時、スイス・アルプスに登山者 に違ひないことは、第一次歐洲大戰 かどうか、それは暫く別問題とし 雲が湧き上つた。このいくさ長引く 國の横車から歐羅巴の天地には、 て、戦時中はもとより、戦後も當分 一時中止したやうな狀態におかれる 「バターよりも大砲」を國是とする 歐洲各國の登山界が活動を

何とか近い將來に立派な遠征登山

國民代表などに比べれば、國拏を消 入りで出掛けながら宙に迷つてゐる 目がある。況んや何とか大會に鳴物 本を認識させる點に於ては遙かに利 を萬國博覽會に出陳するよりは、 花使節だのを派遣したり、 ることは、 費する額が少いだけでもいる。 の財布をはたいて見窄らしい日本館 振袖使節だの、 なけなし Н

クラブやアルバイン・クラブが斡旋 度への入國は、たとへヒマラヤン・ をコキ下ろしてゐる國の登山隊に印 交と登山とは自らまた別だといつて ラヤは一寸見込があるまい。 登山界にとつて殊に關心の深いヒマ 部のナンダ・コート征頂以來、我國 考へると頗る心細いのではあるまい してくれたにしろ官廳が許可すると か。まづ目的地であるが、立教山岳 ふのであるが、その實現性について 餘裕綽々たる所を示してみたいと思 隊を海外に送り出して、涿東日本の 市民大會だの立看板だので英國 政治外

だ少い。なにも遠い國へゆかずとも どの興味を見出し得るか。 が南米の山に就いて知るところは甚 がこの大陸の山に果してヒマラヤほ スカは蘇聯領で到底問題になる 支那大陸の奥地には高山大岳が無敷 い。アフリカやカナダは英國の息が カウカサス、カムチャツカ、アラ 残るは南米である また吾々

整備した遠征登山隊を海外に送 茶ノ湯活 にある、 はない。 遠出は差控へてゐるといふ 實情

不可能であらう。軍備手薄ではいく 狀では、充分な装備、食料の準備は **鑵詰は専ら輸出に向けられ、綿も麻** さも出來ない。 も羊毛も皮革も碌に使用出來ない現 しく述べるまでもなく、ピツケル、 は裝備である。 航の許可が得られたとしても、 假りに目的地を見出し入國或は渡 コツヘル等の製造が禁止され これは何もくどくど 次ぎ

してくる。 げやらとする外貨支拂の問題に關聯 論も出やらが、こゝで最後に取り上 い出先で整へればよからうといふ議 不足なものは物資の缺乏してゐな

祖國で不足したものを向ふで買整へ しても海外での支拂は出來るだけ切 中容易でない。 變へて持出すことになると許可は中 それを旅費或は滞在費として外貨に 國內で遠征の資金は調達し得ても、 生懸命になつてゐる昨今の御時世、 慢し、肌寒むいスフ入りを着て、一 るなどゝいふ餘裕は見込まれない。 文でも餘計に外貨を獲得しやうと一 國民はなめたい砂糖やバターを我 恐る恐る願ひ出るに

遠征の目的地を決定するのも容易で り難い。から書き上げてみると海外 といふ論もあるが、北京郊外ですら い限り、當分はヒマラヤよりも近寄 生命のかけ代へでも持合はせな 登山者よ大陸に眼を開らけ

り、まづ罷りならんといふことにな とに國家的意義でも持たせない限 征登山隊のものだとすると、 かく切詰めた旅費でさへ、 そんな乞食みたいな真似も出來す、 とかなるだのうといふ蟲のいゝ旅行 ふへ上陸すれば在留邦人に頼つて何 りさらである。船賃だけ拂つて、 者もあるらしいが、遠征隊となれば た懐中がさむざむとしてゐては、 それが遠 向

ゆつくり腰を落付けて山頂を窺ふ氣

だ稀薄と言はねばならない。筆者或 とも右に述べて來た障害だけでも、 かも知れないが、心中に於ては少く は總てを餘りに悲觀的に解してゐる 山隊派遣の實現性は目下のところ甚 日も早く除去されることを祈念し どの觀點からしても海外へ遠征登

てゐるのである。

目 次

海外遠征の實現性 島

敏

男…一

獨逸ガルワール遠征 ……望月達 夫

=

- 八幡製鐵所「山の家」
- その後の「浮彫」橋本三八… 三
- ……無田孝 雄
- 會員通信 29
- ◇會報報告………… ……望月·島田·渡邊… 五

九三八年

獨逸ガルワール遠征

望 月 達 夫

隊が這入らぬ年はない位である。 ユラーな地域であり、最近では遠征 ルワールはシツキムと共に最もポピ ヒマラヤの中でもガ

1

出來るだけ未探檢の地域に這

と思はれる。 ス以外ではコーカサスに行つたのみ 8 所を驅使して相當の成果を収めてゐ が、所謂ライト・エクスペデイショ (八頁)にも簡單に紹介されて ゐる 獨逸の一隊の消息は本會報八十七號 人である點は、 ンと云はる可きもので、能くその長 一九三八年にこの地域に這入つた 始めてヒマラヤにやつて來た人 然もこの一隊の全員が、アルブ 吾々に示唆多きもの

一行の登山名(全部初登頂)

九・九 21,365ft (6512m) Bhagirathi North

Chandar Parbat 22,070ft (6728m)

九二〇 'Swachhand Peak Mandani Parbat 20,336ft (6198m)

Ģ 10:1六 Sri Kailash Chaturangi Peak 22,050ft (6721m) 22,742ft (6932m) 20,981ft (6395m)

> Spannratt の五人及び他に 計畫を樹てられた。 T Jonas (醫者)が同行し、輸送官とし Frauenberger, Toni Messner, Leo 隊長とし、Edi Ellmauthaler, Walter この遠征は特に次の點を考慮して S. II. J. Whitehead が隨行した。 Rudolf Schwarzgruber & Rudolf

2 遠征の費用を最少限度にする 入ること。

sqq・)に依り調査し、 vi., p. 106 sqq; A. J. 46. p. 306 スのガンゴトリ遠征の紀文(H. J. 河周圍の山々にその遠征の目標を置 スンの注意等を開き、 知り、又一九三三年のマルコ・パリ 隊にとつて手頃なものであることを 究によりガンゴトリ地域が、 斯くして、マルセル・クルツの研 ガンゴトリ氷 ケニス・メイ 小遠征

連れてムスリー發。 七人のシェルパと五十九人の人夫を 十三名を連れて先發。本隊は二十日、 ムスリー着。十八日、ヨナスは人夫 八月二日獨逸を出發。 八月十五日

年ガンゴトリ地域を測量したオスマ しい地岡と貴重なる助言を與へられ ストンに會ひ、彼から同地方の新ら **尙一行はムスリーにて、一九三七**

なるガウムクから四哩奥の、 ガンゴトリ氷河の右岸 四

向つた。この峰は一九三三年六月 ント・ノース Sotopanth North) と 六〇〇呎の地點にB・C設置。 呎)(マルコ・パリスの云ふサト ギラツテイ・ノース (二一、三六 エルマウターラーとメツスナー 九月八日、二隊に分れて出

上に達した。 急峻な北東面を攀じて困難な登攀を 續けたが、遂に九月九日午後五時 等は天候と良い雪の狀態に惠まれ、 の爲未登頂に終つたものである。 リスが試みたが、モンスーン期到來 頂

南稜より頂上に達した。

11二、○五○呎)を試み、午後五時、 チュハンド・ピーク」と命名された。 ミッドの一峰へ彼等によつて「スワ 河の北端なる、急峻なアイス・ピラ

六○○呎にC■設立。十一日西稜を にCI設立。九月十日西稜直下一九、 マク Suralti の右岸一七、七〇〇呎 ○○呎にCI設立。スラルテイ・バ Basuki Parbat の直ぐ北、一六、 Bamak の左岸、バスキ・パルバット ヤテュランギ・バマク Chaturangi 二、〇七〇呎)に向つた。彼等はチ ツトはチャンダル・パルバツト (二)

二〇呎)の二峰が登れなかつたこと つて、サトパント(二三、一七〇呎) チャウカンバ Chaukamba (11三、四 此の成功に氣を良くした一行にと

面を偵察したが、遂にルートは見出 れず、 只北西面に唯一の然も非常

> あった。 に危険なルートが思考されたのみで

のであると知つた。 カルチヤクンド 尾根から發し、 Kharchakund

採つて十二時頂上に立つ。 フラウエンベルガーとシュパンラ

恰好から英吉利人に「マツターホー ing(二一、四五〇呎)(この山はその は残念であつた。又シブリンShivl-・ピーク」と云はれてゐる。ソの北

> より攻撃すべきものである、と云ふ 乃至六人のパーテイを以て、北東稜 らにもならない長大な岩稜に出くは 東稜を採つたが、深雪に阻まれ、 攻撃をなした。第一囘目は急峻な北 エンベルガーはサトパントに二度 要した。エルマウターラーとフラウ 得ないことが判る迄には長い期間を トパントは、モンスーン前期に四人 し、引返へさどるを得なかつた。 ○○○呎の箇所で、二人きりではど 二囘目は北西稜に向つたが、約二〇、

能性ある西稜の一鞍部へ約二〇、 ゴトリ氷河の源頭へゆき、登頂の すどした。九月十五日、彼等はガン ヤウカンパの登路を求めて四週間 た。がこの鞍部へ達することは、 を負へるポーターに採つて困難で ○○呎)へ達す可き可能性を探査し メツスナーとシュパンラツトはチ 0

約

五週間の困難なる

周

K よっ とつて可能性少なきを知つた。 る許りでなく、

西稜自體も登攀者に

等はおそらく東側から登らる可きも スメル・パルパツト Sumeru Parbat がなされたが、この方面から登る可 イム・バマク Ghanahim へも偵察行 北でガンゴトリ氷河に合流するガナ き山は無く、カルチャクンド山群、 更にケダルナート Kedarnath ケダルナート山群の 間

> は思はしくなかつたので、彼等は更 三三六呎)に登頂した。偵察の結果

に九月二十三日、スワチュハンド氷

せんとして、困難な十時間の登高の からチャウカンバへのルートを發見 て九月二十日、この二人は更に南方

マンダニ・パルバット(二〇、

のが彼等の得た結論であつた。 サトパントとチャウカンバに登り

く望みなきことを知つた。 氷河を登つたが、この方面 カンパの東面に迂囘し、サトパント であると思考された。 はれ、更に北東稜自體はむしろ容易 は左程の困難はなく達せられると思 中止の巳むなきに至つたが、鞍部へ を拒むだのでこの方面からの登攀は に遭ひ、為に人夫はそれ以上の前進 を越え、北東稜の鞍部を目指した。 ヤウカンバの北面の基部にキャムプ ク・バマクを登つた。十月九日、 て其處の人夫を雇ひ、バガト・カラ り、更にマナ、バドリナートに下つ ニイ・パスを越へてアルワ溪谷に至 彼等は二人のシェルパを伴ひ、バー 察せんとして、九月三十日發足した。 一九、〇〇〇呎に達した時、氷 雪 崩 は、チャウカンバの北東及東面を偵 倚シュパンラツトとメツスナーと かくてチャウ からは全

月十九日、二人はバーニイ・パスの 雪の狀態は悪くないと思はれた。十 北方半哩の地點を越え、アルワ溪谷 能性があらう。時季は矢張りモンス く西稜へ捲き、 に達し、この稜を登つて最後は恐ら り高いものであることを知つた。こ 1 强固なパーテイにより試 みらる可 て、 からB・Cに購還した。 ーン前期がよく、 の山のルートとしては北東稜の鞍部 又その技術的困難の程度もかな チャウカンパは四名乃至六名の 之を登るのが一番可 又その直後九月も 1

Ŀ. 呎)を目指した。九月二十九日C— 日午後三時非常に苦しい登高後頂上 はチャテイユランギ・バマクの右岸 テイユランギ・バマクの北岸にある 豫想に違はす素晴らしく、殊に北方 に達した。絶巓からの眺望は彼等の オスマストンの地圖には二〇、九八 一峰(チャテイユランギ・ピークー 六、○○○呎に、C■はその南稜 一九、五〇〇呎に、かくて十月一 期間B・Cに居た四名はチャ

置した當時から一行の注意を引いて イト・マウンテン」) は、B·Cを設 Kedarnath(パリスの云ふ「ホワ Cの南西に位するケダルナー

> ない。 程上昇しないから、雪は良くしまら る二二、四〇三呎峰を越えて達せら 態悪く退却に決した。ケダルナート ○呎近く迄北面を登つたが、雪の狀 B・Cを去つて、脚下の前進根據地 イトヘツドは四人のシェルパと共に シュワルツグルーパー、 あたが、 、 さもなくばその直後二週間がよい。 るべく、時季はモンスーン前期か、 は、二人のパーティでその東方にあ 立てらた、深雪をおかして二〇、〇〇 に到った。Cーは一六、〇〇〇呎に れを目指さず、いよく、十月八日、 、れ以後は氣溫は新雪を固まらせる ・ラー、フラウエンベルガー、ホワ 高度馴致の不完全な間はそ エルマウタ

1, こゝに四人の外シェル パ二人を留 C■は二〇、二〇○呎にたてられ、 を溯り、CIはモレーン上一六、〇 シュに向つた。同行のシェルパは五 た。即ちチャテイユランギ・ピーク ベルガー、ヨナスは最後の行を起し ○○呎に設立。CII一八、○○○呎。 人。ラクトバーン・バマク Raktbarn から印象的に見えたスリ・カイラツ の夜はこの遠征中で經驗された最 十月十三日、シュワルツグルーバ あとはC■に下した。十月十五 エルマウターラー、フラウエン

高度は二二、三〇〇呎に達する。 にはピラミツド型の雪峰が聳立し、

ح

の背後には鳶色の西藏高原がのぞか

時日の餘裕があればこの峰を

も試みんとしたのであつた。

西稜の鞍部に達し、午前一時四十五 午前八時出發、寒風吹きまくる中を 計は零下十六度Cを示した。 \$ 寒冷なもので、 十六日の早朝寒暖

この日

歸路について十一月三日ムスリーに た。二十二日B・Cを後にし、 印度測量局からスリ・カイラツシュ 遙に西藏を眺めた。後日ムスリーの ツトを始めガルワールの全山を見、 ナンダ・デヴイ、マナ・ピーク、カメ から更に素晴らしい眺望に恵まれ、 分頂上をきはめた。 へられたが、之は又此の遠征隊の達 た最高地點でもあつた。 正確な高度は二二、七四二呎と教 十月十九日、全隊員は一緒に 彼等はその頂 無事 なっ

May, 1939, pp. 79-Schwarzgruber (A. Expediti n, The German Garhwal-Himalaya 1938. 84) J. Vol. 51, bу より Rudolf

そ

八幡製鐵所一山の家」

當所に於いての集團登山に就いて Ξ 八

借りる次第であります。

會を毎日行つたり、登山は義務的な 居る次第で、從業員會館の一部には ります。 行事として實行されて居る狀態であ 論的に實踐的に指導、 も山岳部を新設し統制に當らせ、 て、盆々大衆的に發展して、 員によく理解され、 せしましたが、其此後の運動は從業 の相談所を常設したり、登山指導 軽に會報にその報告の一部お知 興味を持たれ 研究を命じて 當局で 理

> 豫てから計畫して居た「山の家」が として、當所々屬の健康保險組合が はその集團登山に伴ふ外廓的な事業 りますが、改めてそれは報告書とし 員諸氏よりも教示を得たいものがあ 先般完成したことに就いてちよつと て後日發表することにして、此處に て山岳部の報告も参考に供し、又會 その登山の指導法、 成績等に就

會の角田吉夫氏に照會し角田氏 る會の會報を借りて、至極く程度の 報告したいと思ひます。 尤も最高度の登山を指導方針とす

歸還したのであつた。

であるまいと考へ此の貴重な紙上を 更に會員の爪生正氏を設計者として け、その完成を報することも無意味 山の家として期待も受けて居ただ 尚北九州方面の山岳人からも新しい 會と線のある山の家として、又一方 畫に當りては私が組合より依頼さ 考へましたが、最初この山の家の計 ことは、多少場違ひの感があるとも 低い大衆登山に關する事を報告する 介された關係上、言はド日本山岳

收容人員=約五十名、

小

屋

番 常

まり話す機會も得られなかった りますし、直接爪生氏とも建設中あ な建築の技術的な内容等は未知で せする程度に留めます。 然し建築には門外漢の私には詳細 たゞ簡單な概念圖を添えてお 知 0

概念圏は都合で掲載出來す會室に保存して

この家を計畫したのは昨年の二月 當時に早急に建設に掛り度い方

> で、約一ヶ年半振りに御見得した仕 つて七月中旬に落成したや うな譯 なつて爪生氏も西下され、一切を約 が生じて永引き、愈々今年の五月に 針であった様であったが、 萬三千圓位で請負はれ、建築に掛 種々事情

福智山、 第です。 秀拔なる山岳景觀を得る。 足立山塊の上部を望見する、かなり 側は森林、東側森林上には貫山塊、 西に遠賀平野を瞰下し、南脇智主峯 で五五〇米位、展望の主なるものは 築紫山脈に屬する福智山 塊 中の 一 建設場所=八幡市を去る約十粁、 尺の岳(標高約五八〇米)の肩 後風呂場、物置增築。 登山路の岐點。 坪=約四十三坪、 尺の岳、 木 小造二階

富に湧出。(此の附近地質古生層) 林中に今夏北九州方面旱魃に不拘豐 場=小屋より約二百米下森

れない外國風の山の家として今後は て居る。九州方面の山では全然見ら に感じのいゝ氣品のある小屋となつ り、それがアクセントとなつて非常 色で外部扉の一部に白色で横線を採 建築家にも注目を受ける ことで せ 出來上りを見ると全體の色調は澁

種不備の點も見受けられるが、 理想的に完備してゆくものと考へら 未だ完成間もないので、 内部に種 順次

れます。

心の出來映えであらうと思へます。 が多く、苦心された模様であるが快 地ではあり種々人夫の使用等に不便 何しろ設計者爪生氏も不馴れの土

せう。 場從業者を多數包含する都市として は當然考慮さるゝ厚生事業であるで るのではないかと考へられます。エ に山小屋が出現して山小屋時代が來 様であるから、二三年うちには各地 最近山小屋建設案が方々に出て居る 此の山の家を楔機とじて當地方に

の紙上を借りて厚く御禮申上げま 種懇切な御教示を願つた角田氏にこ 最後にこの山の家計畫當時から種

その後の「浮彫」

自

田 孝 雄

年もこゝから遠去かつてゐた。この なく、たい氣まゝに上河内をほつつ 現場を見たいといふ以外山に野心も 取附けにも立會ふこともできず、二 去つてから、ウェストン師の浮彫の 一人だった。 き歩いて來やうといふのだ。身輕で まだ残暑のひどい九月上河内に入 北支事變の突發に慌しくこゝを 顔の部分に白いものがベタリと二三 相當にあるらしい。小鳥の仕業だ。 ば漸く届く高さだ。なでて行く人も 分に比べて光つてゐる。手を延ばせ

ある。 は深い。 さすがにもラシーズン・オフの感じ ためか、關西辯の御客ばかり、だが といふ皮肉だ。安房越のバス開通の おかげで山は近來にない繁盛

されて了ふ程小さいものだ。やはり は馬鹿に大きいと思つたが、こゝに 別がつかない。それほど環境にしつ とつてかへすとあつた。岩の面にそ はまつて見ると一寸見には全く見落 くりはまつてゐる。ルームで見た時 ンズは周圍の岩の膚色と同じで、見 れらしいものが漸く見出されるプロ に岩をすぎて了ふ。これでは變だと 目に止まらない。この邊かと思ふ内 **う薄暗いのでたづねる御本尊は中々** 覺えの岩はすぐに分るが、周圍はも 足は何より先にリリーフに向ふ。見 然は大きいのだ。 ホテル前でパスを乗りすてたその

に見える。下の方の字の所は他の部 れたのか、相當にさびがついたやう 年しかならないが、風に雪にさらさ カそつくりだ。取つけてからまだ二 近寄つて仰いで見る。あのレプリ

のか。それ以外リリーフそのものに 除することも出來ない。緣の下邊の ケ所ついてる。手が届かないから掃 兩端から綠青が流れ出してゐる。取 ける時の硫黄が流れて作用したも

かつた爲か、梓川は實に見るかげも

梅雨以來殆んど雨らしいもののな

ない、大正池もひどく小さくなつて

は何の傷痕もなく安全に保存されて

元に新しい御影石の破片がいくつか 草も木も岩にもそのまゝ附いてゐ ひの跡をしみんしと感じる。岩の根 る。この作業に當つた人達の心づか たといふだけで、周圍の岩も小さな ゐる。見覺えの岩にこの像がはまつ

轉つてゐる。思はずこの一片を拾

しい考へだ。 下にコンクリの豪をつけて花でも飾 立札でもたてゝはといふ者もある。 といふ。恐らく我々にはもうとうに し我々の間ではさうしたことはない れるやうにしたいといふのは庄吉ら あれだけでは物足らないから案内の 「名所」となつて了つたのだからだ。 たづねて來るので案内もする。しか て見る。外人はよくこの像のことを 上げた。工事の時の名残なのだ。 地元の人達に其の後の様子をきい

だ。 君は取附けて去る時きつと後がみを も、それに近い氣持で德澤へと急い ひかれる思ひで別れたであらう。私 翌日今一度見た。中々いゝ。 佐藤

關係など考へて見る。 「名所」をつくることの難しさと容易 さ、それとジャーナリズムと大衆の のだ。立札も花臺もいらない。道々 なりきつてないらしい。それでいる つからなかつた。まだ「名所」には フのものは幸にして一つも私には見 **繪葉書を片端から物色した。リリー** 西糸屋、五千尺、と方々で賣店

六十年目に當るのか。白樺などの葉 下生えの熊笹は妙に枯れてゐる。

に非ずして、

日本山岳會々員全體の

る所もない、ぬかるみの丸太も無駄 ぐちやりといつもなら足をふみ入れ るほひがなく、かさくしてゐる。 秋になつたとはいへ、森林全體にう はうなだれて妙に勢ひがない。もう だらけになる。どうもいつもの上河 に道にころがつてゐる。靴はほこり

やけてゐる。眞否は明でないが、ことでも出した。昔の面影はない。ことでも こにも水力の手が入らうとしてゐる 上らなくなって草がひどくはびこり **德澤では靜かな一日を送る。**

山岳」編輯者より

ゐることを書いたが、その外に原稿 用紙の入手難が遲刊の一因をなして 印刷校正中で、十一月の内には刊行 せてゐるのである。 の入手難も編輯者をして常に苦しま の運びになる豫定である。前號には けすることが出來た。第二號は目下 の下旬に漸く會員諸兄の手許へお屆 山岳」 第三十四年第一號は九月

賴まれもせぬ原稿を自ら進んで書く めて稀である。この忙しい世の中に れや、原稿の題目に就て頭を惱まし れまでだが、「山岳」は編輯者の雑誌 原稿の送られて來るやらな場合は極 てゐるが、中々思ふやうにゆかた い。會員諸兄から自發的に「山岳」 人間がある筈がないと言はれるばそ 編輯者は二六時中、 執筆者の額觸

牛が てくれるであらう。ひよつとしたら 岳では雪かも知れない。(九、 雨 來た。浮彫を守つてくれる地元の人 が、要領は得なかつた。 しいものをかついだ人夫にきいた との話。 らう。そして上河内には濡ひを與へ 達に感謝しながら。今日は都でも からしてひからびた上河内を出て 小鳥の糞も洗ひ流してくれるだ 歸り途吉城屋で測量機械ら さ

内と様子が違ふ。

ひするのである。 兹に敢て會員諸兄の助力支援をお願 機關雑誌であると確信するがゆえに

80 山岳の研究、山岳に關する古書の考 こと疑ひない。 せられるならば、 なども會員諸兄から忌憚ない稿が寄 のがある。また新刊闘書の批評紹介 會員諸兄の御報告に俟つ所大なるも 登山史、文學或ひは美術に現はれた ある紀行、或る地域の山塊に於ける 例へば輝かしい登攀記録、 その他、遺難事件の真相なども 取上げられるべき題目は多々あ 地質地理植物等に關する研究な 誌上活況を呈する 趣き

である。 して、諸兄の助力をお願ひする次第 の刊行がむつかしいことを玆に繰返 援なくしては内容充實した「山岳」 ふ積りであるが、會員よりの支持後 編輯者も出來得るだけの努力は拂

(藤島)

らせてゐました。

は餘り頂上らしい頂上ではあり

きます。(十月一日)

北支派遣黑田部隊氣付吉岡部隊

揃つて、赤蜻蛉がキラく、と羽を光 なりそめ、薄はもうすつかり穂が出

通

久 繩 望 月達 夫

たことが、 ました。 いたお天氣が續いた直後の日曜日、 こと」、一人も登山者に逢はなかつ 去る九月二十四日に赤久郷山に登り 颱風のお蔭で、 珍らしい秋晴れに恵まれた なんとも云へず愉快でし 一週間許りぐづつ

まるにつれて、浅間、荒船、 峠への長い路を登りました。 た。下仁田で草鞋を求めつつ、 から青倉川沿ひの歩道を進み、杖植 にくつきりとゑがき出されてゐまし びた西上州の美しい山々が紺青の空 上信線の窓外からは、 赤城等の山々が視界に入つて 朝の光を浴 妙義、 身が高 跡倉

を覺えました。 がたいられしさが込み上げて來るの 薄の穂先に眺められた時は、 しい御座山が逆光を浴びて黒々と、 流川の奥に、昨秋の憶ひ出もなつか 奥秩父の山々が手にとる様です。 ませんが、それでも木立の合間から 前に述べた山々や南側の兩神、 名狀し

持つた御荷鉾山の双頭が見え、路は て、食場、小峠を經て秋畑村の梅ノ 我々は右の近道をとつて鹽澤峠西方 どん~~下って二つに分れますが、 の鞍部に出、地圖の路通り北に下つ 頂を東に下ると、ふくよかな線を

て、 は見とれたことでした。梅ノ木平の であらうと、何度も急ぎ足を止めて 月光が降る様におちてゐました。 ゐる頃は、旣に陽も落ちて、美しい らひ、その間裏の雄川の河原に下り 郵便局で富岡から自動車を呼んでも 繒の様な姿、 められた夕靄に煙ぶる上州の自然の 木平に出ました。途中から前面に眺 足を洗ひ、汗ばんだ體をふいて なんて浪曼的な美しさ

峠迄登り約二時間半の間と赤久繩山 でせう)、それから左手(南側)へ二、 路はおそらく八倉峠迄續いてゐるの の邊で水の必要に迫まられた時は知 三十間下つた處に小含跡があつて、 んが、峠から西へ半町程進みへこの の尾根近くでは、 つて置く可き水場なので附記してを の直ぐ下の澤に求められます。 尚青倉村の土谷澤の上手から杖植 水は水められませ

午。それから赤久繩の頂上迄は洵に きます。峠に着いたのがかれこれ正

かな尾根道で、

濶葉樹は少し赤く

北 ょ

ましたが、二三日前また北京へ戻つ が臆劫です。九月末歸京の豫定。 い氣候で、こゝを離れて旅に出るの 期待してゐます。北京もそろそろよ ますが娘子關あたりの山西の風景を 望したことです。明日、太原へ向ひ 蒙古らしさを持つてゐないのは稍失 て來ました。京包沿線が思つたほど (九月十二日) 八月中旬東京を出發して北京に参 包頭まで蒙疆の旅を續けて居り

蒙 強の 秋 渡邊

けてゐるのも何とやらで會報へ一筆 御健在のことへ思ひます。

う。

風が出る午後は美事な

雪煙が頂 るもの、サンドスキーなら満點でせ なかョカ砂で粉雪中の粉雪に匹敵す の幻想を愉しむ程度です。然しなか ない當地では近所の沙漠でスローブ ろスキーの出動する頃ですが、雪の 草原は靜りかへつてゐます。そろそ も全然沒關心の態で綏遠省(昔の)の 球がひつくり返る様な世の中の動き ら當方も冬に入りつくあります。 いと思つても肝心の木がてんであ から流れてゐます。スキーを作り

なつた。 ら虎ノ門の本會集會室は大變便利 新橋澁谷間の地下鐵が開通して

公平

進上。穴埋になれば幸甚。 三日に初雪、五日に初氷でどらや 餘り怠

りません。沒法子(十月七日)

圖書室集會室へのお誘ひ

があるのにと聊か不思議に感する。 狭い階段を地上へ出ると不二屋ビル あるので、 は午後一時から五時頃まで開室して 東京市内だけでも何百人といふ全員 みると、いつもきまつた額觸れで、 が、ルームに備付の來室者記名帳を あることは會員諸兄御承知の通りだ の前だ。その三階にJAC岡書室の 月水金は午後六時頃から、火木土 虎ノ門停留場から恐ろしく 大いに會員の來室を希望

そのとき刊行した展覽品目録は會

複製も掲げられてゐる。穗高涸澤へ 美太郎氏寄贈のセガンティニの名書 真額もあるし、中村清太郎氏の ルンリよりみたるアイガーなどの寫 植氏のアイガー東山稜、松方氏のへ ツターホルンの大寫真を始め、會員 る。壁間には秩父宮殿下御撮影のマ 山岳岡書、 と圖書を繙く部屋とがある。 かないまでも、隨分澤山所藏してゐ せまいが駄辯を弄するに足る部屋 茨木猪之吉民の水彩畫、 定期刊行物は完備とはい 油

言する次第である。

られない向もあららかと、こゝに一 員中には、或は右の目錄について知

山の本に圍まれて、山の友と語るに 地圖幅のリリーフは會員吉澤氏苦心 型も珍らしいものだ。五萬分一上高 JACで建設を計畫した山小舎の模 の作だときく。山の繪や寫眞を眺め は、こんないゝ場所は滅多にないと 浦松佐 地圖繪圖類。 和書の部=江戸時代、 リカ、ニュージーランド、 其他アジア、南北アメリカ、アフ その後。 因に目錄の內容は左記の如し。 術傳記。 技術その他。 明治時代及び

十錢、 送料六錢 葉

敢て會員諸兄に來室をお誘

山岳圖書 展覽會目錄」に就て

から四年になる。 ひだのやらに思はれるが、 の樓上に開催したのは、ついこのあ 岳岡書の展覧會を、 本會創立三十週年を機として、 東京日本橋丸善 旣にそれ

のにとつて、座右を雕し得ない貴重 岳文獻に多少なりとも關心を持つも 明快な解説を附したこの目錄は、 圖繪圖三十四種の大部分について、 まゝ今日に及んでゐる。 場でも幾分頒布されたが、その後虎 な内容を盛つたものといへやう。 ノ門の事務所の戸棚に深く藏された 和書三十三部、 こゝ三四年來新たに入會された會 洋書一八二部、 Щ

洋書の部=歐洲・アルプス、スピツ ベルゲン、コーカサス。アジア・ ヒマラヤ及び中央アジア、日本、

(菊版五十六頁、圖版二

定價五



會 務 報

九月定例理事會並に

門本會事務所 九月十九日(火)午後六時半

木暮、 野口、中司、 三田、木村、塚本、額田 島、黑田、角田、鳥山、 冠、 高頭、植、 石原、 加藤

例理事會 (武田)

臺灣登山小史=沼井氏、小五臺山 山岳第三十四年編輯報告 第一號出來近日配本の筈 第二號原稿主なるもの

傳一望月氏 吾妻短スキー行=吉澤氏、ケラス =京城大學、岩管山附近=松久氏

一、小集會開催の件 一、會報編輯報告 十一月頃發行の豫定なり 授教、寒中富士山頂滯在談岡中 ニューギニア旅行談猪熊帝大助

社團法人に組織變更の件 社園法人設立の件は本決議とし左の 新入會員詮考の件 今秋中に開催の豫定 登山團體懇談會の件

定款=横、 通り設立準備委員選任し準備着手の 參考事項調書作成 = 鳥山、 設立趣意書=横、 藤島、 藤島 黑田、 中司、 角田、 加藤 吉

二五八番 大阪府 住澤梅太郎

il

會、 會員章番號一二九九) 本會は兹に謹みて哀悼の意を表す。 昭和十四年九月十九日逝去せらる、 德永正雄氏(昭和六年三月入

受贈會報部報雜誌

魚市場山岳會 日本雪線山岳會 東京野步路會 大阪ミテコー會 熊本アルカウ會 東京みなかみ會 東京地學協會 マウント・ロバーター・グループ M·R·G (みなかみ) (山岳趣味) (地學雜誌) 報 報

(アルカウ趣味) 會 會 (K·K·G) 報

日本アルカウ食 明峯山岳會

高千穗高商山岳部 部 (もくわん) **山** 幸 日光諸方道廼記 富士案內

阪神山岳會 市役所山岳會 廣島山岳會

登山とスキー社 安田山岳部 (登山とスキー

横濱山岳會 東京アルカウ合 東京旅行クラブ (アルカウ

會

東京嶺山岳會

Sierra Club Bulletin 8. 山梨縣景勝地協會 國立公園協會 東京登步溪流會 臺灣山岳會 福岡山の會 京都山岳會 文 堂

針葉樹 厚生の日本(雑誌) 美しき民家を求めてへ木間・小林共 第十號 東京商大山岳部殿 厚生協會殿 吉田竹志氏

昭和十四年十月三十日發行 昭和十四年十月廿九日印刷

發行餘編輯者 行爺編輯者 石 原 · 殿 東京市豐島區池袋四ノ四五八 東京市芝區琴平町一(不二屋ビル)

印 印 東京市芝區濱松町一丁目十三番地 所 振替東京四八二九電話芝(四三)一六四九 日本山岳會 文堂印刷 庄 所

偃松山岳會 東京山座會 溪

熊本アルカウ會 类健步行會 山

登山とスキーの會 合 合

谷 E

昭和山岳會

關東旅行クラブ

東京山彦山岳會

谷 山 小屋

全く恐縮の外ありません。多くの方

夏以來の會報發行遲延については

(國立公開)

なかにこの數頁を纒める餘裕すらな 面から度々の叱責を蒙り乍ら、なか

(臺灣山岳彙報) (甲山峽水) (せぶり) (京都山岳)

9. 9

Natural History

を主眼とすると頁数の増減、内容の と呼吸が合ひ兼ねるため、定期發行 頃は電力節減や何かで印刷所の操作 てやりたいと考へてゐます。たど此 この手拭を鉢卷に代へて、精を出し つづけて來たわけです。これからは く、何處かの政府のやらに頻冠りを

De Berggids

願ひします。次囘締切は十一月七日

に何時も乍ら、御寄稿の程を切にお その點をどうか御寬恕下さい。最後 偏倚などは避け難いこと」なるので

赤井綠志

御山繪圖日光山名跡誌 日光名勝獨案內

富士山明細圖 アラスカ氷山旅行

甲斐國全圖 大日本一統與地分國圖

附足尾銅山井二庚申山記

 \equiv 角 報

٤ 南都留郡誌 廣島縣山岳目錄

山水叢書河及湖澤

以上十四部 吉田禮二氏

後